

ジャカランダの木の下で考えたこと

—マダガスカル of 青少年更生施設を訪問して—

西 本 希 呼*

マダガスカルでの初めての現地調査時に日本から持参したハイビスカスの花輪が、現地の人々の目に留まり、たちまち人気となった。それ以来、私は、首都で「花」と呼ばれている。ハイビスカスという、南国のイメージがあり、実際マダガスカル of 南部ではハイビスカスの花を見ることができが、首都は標高が約 1,500 m と年間を通して涼しい気候であり、首都近辺 of 居住者は、ハイビスカスを見る機会 is あまりない。一方、日本人 of 私 of 目に留まったのは、ジャカランダという紫色 of 花をつける木である (写真 1)。9 月ごろに、紫 of 花が桜 of 木 of ように満開となり、街路樹として、町を色彩豊かなものになっている。

私は、マダガスカルとインドネシアを主な

研究調査地として、言語 of 記述を基軸に現地調査を行なってきた。なぜ、アフリカ大陸 of 東海岸 of 島と、東南アジア of 島を行き来するかというと、マダガスカル語は、インドネシア諸島で話されている言語と同じ系統 of 言語であるためだ。

知らない土地に降り立った際に、一番初めに足を運ぶ場所は、市場である (写真 2, 3)。現地に到着した翌朝にホテルで現地 of 治安情報を尋ね、その後、市場へ散歩に出かける。地域社会 of 物価を知り、市場 of 売り子と仲良くなれば、生活 of 知恵や、現地で生きるコツを教えてもらえ、モノを買えば、さらに会話ははずむ。市場で売り子と話し、現地情報を得ることは、異文化への適応への最善策であり現地調査 of 出発点であると私は考えてい



写真 1 ジャカランダ of 木 (マダガスカル)



写真 2 インドネシア (サヌール市) of 市場

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真3 スタンプを売る路上商人（マダガスカル）

る。調査の過程において、さまざまな社会階層の人々と交流し、研究協力を得た。

ここで述べるのは、私を温かく迎えてくれた、マダガスカル首都アンタナナリヴの郊外にある青少年更生施設の子どもの話。裁判所から観護措置の決定によって送致された青少年が入所する施設である。日本でいう、少年院や、児童福祉施設などに相当する。

紫の花の木の下で、毎日のように刺繍入りの布、編み物、小物入れ、パニラ、香辛料などを必至に売り歩く人たちがいる。実際の価格の10倍以上の法外の価格で売りつけてくる売り子も少なくない。市場での情報収集を終え、ある程度の現地情報を知った後、貧困や病や障害などの社会的ハンディを他者にさらけ出すことにより同情心を狙った金品追及や法外な価格で値段交渉を求められた場合、私は、正面からぶつかり、とことん議論を行なう。結果は、現地価格で購入できたり、私の所持品と物々交換を行なったり、良き研究協力者となったり、相手側が諦めて去っていくなどさまざまだ。

闘いの後、冷静に売り子たちを見つめなおしてみると、年齢が随分若いことに気がつく。彼、彼女らの中には、青少年更生施設を出て、路上商人としての生き方を選んだ人たちがいる。その実態把握を現場で確認できたのは、3回目の現地調査時である。施設の存在は1回目の調査時から把握していたが、繊細な課題であること、マダガスカルの社会構造や地域社会の慣習を知らずに施設を訪問することは、情報の誤認につながり、また、倫理的側面からの配慮に欠けるのではないかと思い、躊躇していた。2回目までは、国際機関、教会の宣教師団、国際協力、私企業、個人として教育や開発に関わる人からの情報収集を行なってきた。

3回目の調査で、首都の中心街から車で約20分のところにある、女子専用の青少年更生施設（メゾン・ドゥ・ジュンヌ・フィユ）を訪問した。現地で長く研究している人や、マダガスカル人の役人に、「マダガスカルにおける非行少年とその更生施設の実態を知りたい」と相談した際に紹介された施設である。マダガスカル国内には、首都に女子専用の施設が2カ所、男子専用施設2カ所、首都郊外の都市に男女混合施設が1カ所存在する。法務省などの公的機関によって施設の運営費が賄われている公的福祉施設である。対象年齢は8歳以上18歳未満とされ、入所期間は、最短で1ヵ月、最長で1年。施設は全寮制で、私が訪れた首都のA施設では約30名の女子が共同生活を行ない、3名の教員が指導にあたっていた。また、社会学専攻の学生2名が、施設運営の補助などの現場研修

を行ない、一般教養科目を教えている。施設の主な目的は、出所後の生活空間の確保、健全な人間関係の構築のほか、収入を得て自立した社会生活を送るための技術の習得を目指した職業訓練が重要な役割を担う。

訪問先の施設の教員によると、送致理由には、軽犯罪のほか、迷子や、保護者不明があげられる。迷子や保護者不明を理由に、送られてきた青少年に関して、保護者が簡単に見つかるとのかどうかという疑問が生じるが、保護者もしくは引き取り先の親族は 100% の確率で必ず見つかるのだそうだ。

施設の関係者の話によると、ここに送られてきた青少年は無償で衣食住が提供され、教育を受け、社会に出ることができるよう、非常に「ラッキー」なケースであるという。

フランスの非政府組織『国境なき医師団』の 1997 年の推計では首都でのストリート・チルドレンは約 3,500 人とされる。行政機関による要保護児童の発見には限界がある。民間団体もしくは私人が、路上で迷子になっている子どもを保護し、行政機関に届けるという行為は、交通費、人件費、通信費など予算を必要とする。全人口の約 8 割が都市部との連絡が不便な農村部で生活を営んでいる。都市部の就労者であっても、多くの場合、自身の親族を養うので精一杯である開発途上国では、路上で迷子となった子どもを行政機関へ届けることは、容易ではない。

ここに、簡単に施設内の日課を紹介しよう。平日の月曜から金曜までは、朝 5 時に起床し、一日が始まる。編み物、手芸、ミシンのかけ方などの裁縫が一週間の作業内容の

8 割以上を占める。マダガスカル語の読み書きの授業、聖書講読の授業がそれぞれ週に 1 回午前中に約 1 時間割り当てられている。土日に、夕方 4 時ころから数時間、両親が訪問する時間が設けられている。朝 5 時起床という、日本人の時間感覚では早い印象があるが、マダガスカルでは朝市が 6 時ころからにぎわい、5 時起床は彼らの日常生活である。一応の日課と週間予定は決められているが、ダンス、歌、スポーツなどのレクレーションを随時組み入れ、私のような急な訪問者があった場合などは合唱やダンスの披露を行なうなど臨機応変に対応している。食事の準備は、休憩時間にその日の食事係、掃除係が準備を行なう。日本の施設との大きな違いは、算数や社会などの、学校教育で教えられる教科教育が日課に組み込まれておらず、技術教育の一環である裁縫が大部分を占めていることにある。裁縫がなぜ、施設内の日課の大半を占めるかは、彼女らとの対話が進むうちに明らかとなる。受付には、施設の子どもたちが制作したマフラーや小物入れなどの民芸品が販売されている（写真 4）。収入は施設の運営費に充てられる。施設内の事情をよく知る人や、入所者の家族や友人が月に数回程度の割合で、購入や注文にくるそうだが、広く一般には知られていない。

施設の教員に、収容されている約 30 名の送致理由やその背景を知りたいと打診したところ、直接彼女らに聞くと教えてくれるとの助言を得た。繊細な問題であり、個人の人格や背景によって柔軟に対処する必要があるため、日課をともに過ごししながら、個別に話を



写真4 施設の子どもが作った品物 (マダガスカル)



写真5 裁縫を学習中の私 (マダガスカル)

聞くという手段をとった。

私は、日課のうち、裁縫の授業、聖書講読 (マダガスカル語) の授業、昼食の準備に参加させてもらい、最後にダンスを踊った。裁縫は不器用な私にはこなせず、作品は作ることができなかった (写真5)。聖書講読の時間では、マダガスカル語を音読したところ、激励の拍手で温かく迎えてくれた。ちなみに、訪問時の収容者のうちの3分の1が非識字者である。私が食事係の担当をさせてもらった日に、日本から持参したカレールーと現地で調達した野菜や肉で、カレーライスを作った。一緒に料理をしたり、彼らが手がける手工芸品の作り方を習ったりしているうちに、打ち解けて話をしてくれた少女が数名いた。彼女がこの施設にやってきた理由は、家政婦として働いていたときに、働き先の家庭の金品を盗んだためだという。

最後に、将来の夢は何か、将来どんな職業につきたいか、と尋ねたところ、27名のうち、事務員志望が1名、乾物屋の店員志望が2名、美容師志望が1名、残りは手工芸品作りやその売り子との回答を得た。施設管



写真6 破棄となった空き缶で作られたおもちゃ (マダガスカル)

理者の話によると、出所後は、家で手工芸作業を行ない、露店商人や路上商人として生計を立てるケースが多いらしい。

毎年、南部での調査を終えて9月に首都へ戻る。ジャカランダの花が満開となり、私をよく知る路上商人や、露天商人が、モノを売りに来たり、調査の様子を聞きに来たりする。不合理な要求に対して、正面からぶつかりあい、喧嘩や議論をしあった商人たちとは、今では、すっかり仲良くなった。オーダーメイドで私の好みに合わせたおもちゃを作ってくれる。たとえば、日本のジュースの空き缶を持参すれば、空き缶の模様を生かし

た車を作ってくれるとのこと（写真 6）。

日本においても少年院などの更正施設の存在意義や実態は、脚色されたメディアによる間違っただけの印象や、事件発生後の感情論が先走り、正しく理解されていない。日本では、概して少年院や児童福祉施設は、一般社会に対して閉ざされている側面がある。一方、途上

国では、法の整備や社会制度上の保障は追いついていない傾向にある。青少年更生施設に照準をあて、法的側面と社会福祉の側面の両面からの分析を行なうことにより、途上国における現行の社会制度と子どもの教育システムにおける問題点を明らかとすることを今後の課題とする。

イノシシを通した島と島との交流

—「第 2 回カマイ（イノシシ）サミット」の報告—

蛭原 一平*

11 月に入ると北風が強く吹きつけ、長袖が必要な日も多くなる。曇りがちの日が続く、沖合の波も高くなる。晴れ渡った紺碧の空に群青の海、といったような南国の趣はあまり感じられない。そんななか集落のあちこちから、イノシシ捕獲用の罠をつくる音が聞こえ始める。ここ沖縄・西表島にイノシシの時期がまたやってきたのだ。

沖縄でイノシシというのは、あまりピンとこないかも知れない。しかし、奄美諸島や沖縄島、そして石垣島や西表島といった、面積が比較的大きく、森林の広がる島々にはイノシシ（リュウキュウイノシシ）が棲息し、古くから狩猟され（写真 1）、暮らしのなかで利用されてきた。そのような琉球列島における人とイノシシとの関わりを見つめ直すとい

うサミットが「亥年」にちなみ 1995 年、沖縄島最北端の集落、奥^{おく}でおこなわれた。それは、大学など研究機関による企画でもなければ、地方自治体など行政が主導となった催しでもなかった。農家や猟師の人たちをはじめ、日頃イノシシに関心を寄せる地元有志が、個人的に親交のある研究者たちと一緒にやっておこなったものだった。

それから干支で一回りした 2007 年 12 月、2 回目の「カマイ（イノシシ）サミット」が西表島祖納^{そない}で開催された（「カマイ」は西表方言でイノシシのこと、当日の会の様子は八重山毎日新聞（2007 年 12 月 17 日朝刊）、沖縄タイムス（同年 12 月 21 日朝刊）、奄美新聞（同年 12 月 24、25 日朝刊）など地元新聞で紹介されている）。琉球列島における

* 国立民族学博物館（外来研究員）